



2025年 5月10日
第191号

JR東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本

発行人 梶田 優一
編集 情宣 担当
ホームページ



<http://www.jreu-yokohama1.jp/>

イーハトーブ

5月10日号

新年度に入り、早くも一か月が経過した今、新入社員も職場の雰囲気慣れしてきた頃ではないか。「故郷（ふるさと）」はと訊かれれば、一般的には生まれ育った場所を答えるだろう。それはなぜか。幼少期なり思春期なり、自分が、心が形成された場所だからではないか。そう言った場所、あるいは時期に愛着や思い入れがあるからだ。私は考える。この故郷を、社会人と言う新たな出発点で考えてみた場合はどうか。会社で考えてみれば、初めての配属先を故郷と表現するか？そのような情緒的なことはなく、初めての配属先は「出身」と表現するのが当たり前、通例。ここで、なぜ「故郷」と言う「言葉」を出したかと言えば、会社に入って「仕事」を教えてもらい知識を高める過程が、社会に出るまでと重なるからだ。仕事を「（カギカッコ）で表したのは、手順だけではなく、意義や成り立ちを含んでの意味である。多くの人に関わってもらって知識や技術を身につけて一人前となっていく。しかし知識や技術だけではなく、経験や意識を学び成長させてくれた場所、思い入れや愛着のある職場こそ自信をもって「〇〇の出身です」と言える、会社での「故郷」ではないか。なので、必ずしも始めての配属先が「故郷」とは成らないかも知れない。

今、会社内での「故郷」が失われつつあると危惧する。新たな地へ赴くこと、そのこと自体は経験と言う成長を促す。しかし在籍10年以内の異動、今までとは違った職種への転換、もしくは多職種兼務。時には出身で図ったり、異動したから関係ないなどの外的要因が、人間関係を希薄化する。職場が一通過点となった場合、個は意義を学ぶことを、多者は意識を継承することが薄れるのではない。人間関係の希薄は、隣の人が何をしているか分からない、または注意を払わなくなる。この人はどこまで知っているかと測りかねるし、お互いの性格や考え方も知らなければ会話は深まらない。会話があれば、気づきも生まれる。そこそが生産性と創造に繋がるのではない。成長の為、多くの人と関わり会話し、異なる意見にも耳を傾ける。環境や風土に流されてはならない。自ら学ぶ姿勢こそ心に留め置かなければならない。人は一人では成長できない。「人の心に木を植える」、苗を植え、みんなで育てる。社会の中で「ふるさと」といえるところを創るうではないか。

Y・H

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちも外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行います。